

日本の対外宣伝グラフ雑誌に見る中国仏教史跡調査 —雑誌『CANTON』における関野貞「雲岡と龍門」の掲載を中心に—

陳 鶯 (京都工芸繊維大学)

本発表は日本工房が南支派遣軍の出資により 1939 年に中国広東で発行した英文月刊誌『CANTON』1 巻 2 号に掲載された学術記事、関野貞 (1867-1935) の「Yünkang and Lungmen」(「雲岡と龍門」) の掲載経緯を考察対象とする。

『CANTON』は国策宣伝グラフ雑誌でありながら、編集当時から「中国研究の指針」となることを目指し、日本人学者の中国研究の論文を主な掲載対象とした。しかし、この雑誌は刊行期間が短く、所蔵も限定されているため、本発表で扱う関野貞の記事は、今までの関野貞研究で言及されたことがなく、学界でほとんど知られていないのが現状である。

さらに、雑誌『CANTON』にある数々の学術論文において、関野貞の記事は極めて特殊な存在である。何故なら、『CANTON』が掲載するのは、基本的に日本のトップクラスの大学や研究機関に所属する現役の学者の代表的な研究成果であったが、関野貞の場合は、掲載時点で既に故人となっており、「雲岡と龍門」も恐らく当時日本の学界において彼の最も代表的な研究ではなかったからである。それ故、『CANTON』が関野貞の「雲岡と龍門」を掲載記事として採用したことは、必ず特別な理由があると考えられる。したがって、その動機や背景を考察することにより、現在の関野貞研究ないしは中国仏教史跡調査に関する学術史研究において顧みられていない側面、つまり、日中戦争中の日本の対外宣伝において関野貞の中国研究がどのように扱われていたのかを明らかにする必要がある。

本発表は関野貞の「雲岡と龍門」が『CANTON』に掲載される際に影響を与えたであろう要素の解明に焦点を当て、その学術的及び社会的背景、さらに対外宣伝においてこの記事が果たした役割という観点から分析を行った。

その結果、まず、テキスト分析により、『CANTON』版「雲岡と龍門」は関野貞が 1918 年中国調査後に発表した数点の文章を総合し丹念に編集されたものであることが分かった。そして、20 世紀初頭の中国仏教史跡調査をめぐる国際的学術競争の文脈から、この分野における関野貞の国際的影響力に加え、日本人学者による両石窟に対する独占的調査を可能とした日中戦争の進行が、「雲岡と龍門」の掲載を後押しした学術的要因であることを明らかにした。さらに、日本軍に占領された雲岡石窟は当時の日本社会のなかで「帝国観光」の対象となり大きなブームを引き起こし、「雲岡と龍門」の掲載を促す社会的要素となったことも指摘できた。最後に、関野貞の記事を日本の対欧米プロパガンダ戦略における役割という観点から分析し、『CANTON』は、雲岡や龍門など占領地における日本の古跡保護を前面に出すことにより、日本が欧米と肩を並べる「文明的な」帝国であることをアピールし、日本の中国進出の正当性を補強したと結論づけた。